

ヨーロッパにおける遺跡の再生・活用法の研究

遺跡の調査、保存、活用という分野ではわが国よりも長い歴史を有するヨーロッパのうち、イギリス、ドイツ、ギリシャを訪れ、これらの国における遺跡の現状、保護、修理、復原、管理、運営などの考え方とその実際について調査した。1993年8月9日に出発し、10月22日に帰国した。

イギリスでは大英博物館、ロンドン博物館、ストーンヘンジ、ハドリアンウォールなどの著名な博物館、遺跡を見学した。イギリスの博物館や遺跡で特に感じたことは展示や整備の充実ぶりもさることながら、附属するレストラン、コーヒーショップ、インフォメーションセンター、ミュージアムショップなどが充実していることであった。博物館や遺跡が見学一辺倒ではなく、休息、食事、買物などを楽しみ、快適に時間を過ごすことのできる施設となっており、夏休み中ということもあってか家族づれの利用が目立った。遺跡の復原整備では掘立柱建ての平地住居からなる5世紀の集落遺跡であるウエストストー・アングロサクソンビレッジでは、埋め戻した上に数棟の建物を復原するという、わが国でもおなじみの方法で整備されていた。掘立柱の柱穴という同種の遺構の整備方法として、行き着く先は同じという感じがした。しかし、できあがった形は似ても、復原建物を作り上げる過程、組織、活用法などは、日本とかなり異なる。作り方でいえば、日本の工事委託方式に対して、ウエストストーでは直営方式である。学芸員にあたる人が作業員やボランティアの人々と共同して、斧などを使い、当時に近いやり方で建てている。活用面では、入口のインフォメーションセンターで貸してくれる想像豊かな内容のカセットテープを聞きながら、順次、見学する方法であった。

ドイツではフランクフルトにあるドイツ考古学研究所ローマ・ゲルマン研究部のエクハルト・シュペルト博士にお世話になり、ザールブルグ、クサンテン、カンボディウム、コンスタンス、コンゲン、ホッシュドルフ、ハイタブなどドイツ各地の整備・未整備の遺跡、発掘調査現場、博物館、古庭園を見学した。石やレンガの遺跡でも建物を完全に復原する整備が行われていること、建物の平面表示の方法、覆屋の現状、発掘調査のやり方、博物館における展示のアイデア、公有化した遺跡の管理办法など、多くのことを学んだ。

ギリシャではアテネ周辺とクレタ島の遺跡と博物館を調査した。石灰岩を用いた雄大な遺跡であり、保護と修理に重点をおいた整備が多く、失われた部分を復原する整備は少ない。そうした中にあってイギリス主導で行われたクレタ島クノッソスでは、内部の壁画を含めて部分的な復原がなされていた。こここの復原には批判的な評価が多いと聞いていたので、どんな大それた復原が行われているかと期待して見学したが、日本の遺跡復原に比べると大変おとなしい内容であった。ただし、意識して行われ

ているのはオリジナルの遺構に直接、復原部分を加える際に、オリジナルと復原した部分が明らかに識別できるように復原していることであった。

ヨーロッパと日本では遺跡の有様、材料、構造などに大きな差があり、遺跡の保護や見せ方の技術面ではそのまま応用できない面もあるが、基本的な考え方や遺跡ごとに最良の方法を模索する姿勢、来訪者に対する対するサービス施設など、大変参考になった。

(高瀬要一)

近年、復原整備されたローマ時代の遺跡、カンボディウム
(ドイツ・ケンブトン)